

中嶋 嶺 雄
東京外国語大学教授

進む中ソの“ゆるやかな同盟”関係

来年には外相会談実現へ

中国における非毛沢東化の進展と呼応してブレジネフ体制末期から始まった中ソ和解への動きには、このところ一層の拍車がかかっている。中ソ関係の最近の諸展開を直視するために、私はこの八月下旬から九月上旬にかけてモスクワに滞在していたが、ソ連側の期待がさらに大きくふくらんでいるのみならず、モスクワにおける中ソ友好関係の進展ぶりもきわめて注目すべきものであった。

新しいゴルバチョフ体制下でクレムリン内部の対中・対北朝鮮関係など社会主義兄弟諸国関係の責任者と思われるアリエフ政治局員は、私のモスクワ滞在中の九月三日夜、在ソ中国大使館が催した対日戦勝四十周年のレセプション（ミズー

リ号上での日本降伏文書調印四十周年祝賀の夕べ）に出席し、一時間以上にわたって歓談していたというけれど、クレムリンの最高指導者の一人が中国大使館に Outreach しているように時を過ごしたのは、一九六〇年代初頭の中ソ対立発生以来初めてのことだといえよう。米ソ関係についてのゴルバチョフ書記長のブレインでもあるG・アルバートフ・ソ連科学アカデミー米加研究所長は、この十月中旬に北京を友好訪問したが、党中央委員も兼ねるアカデミー会員の初訪中としてやはり注目に値しよう。

このような中ソ間交流は、このところきわめて活発化しており、二十余年ぶりに北京放送のロシア語講座が再開されたこの八月には、全ソ労組代表団も二十年前ぶりに中華全国総工会の招きで訪中し

た。去る三月の中国全国人民代表大会代表団訪ソの答礼として、この十月中旬にはソ連最高会議代議員代表団が訪中したが、議員交流も二十年前ぶりに再開したのである。同じ十月上旬にはソ連作家代表団の二十余年ぶりの訪中も実現した。

こうした中ソ関係のさまざまな発展のうえに、いよいよ来年には中ソ外相の相互訪問が実現することとなり、この点は今回の国連総会の折に、シェワルナゼ外相と吳学謙外相とのあいだですでに合意に達したことが公表された。

一方、中ソ間の通常貿易のみならず、黒竜江のブラゴベシチェンスク港（ソ連側）と黒河港（中国側）がこの夏に相互開放されるなど、いわゆる国境貿易もこのところ増大の一途をたどっている。新疆ウイグル自治区ではウイグル人やカザフ人が国境を越えて相互に交流することも許されるようになったという。さらに注目すべきことは、新疆ウイグル自治区を経由してソ連に至る北京―モスクワ間の新しい鉄道建設計画が進展しつつあることであり、中国側もこの「大西北開発計画」にはソ連の援助を期待していると

いわれ、最近着工が決まったウルムチーウス間の鉄道(北疆鉄道)が完成すれば、ソ連側は中央アジアのアルマアタから中国国境まですでに路線が出来上がっている。あとは中国側が国境までの路線を残すのみとなり、いよいよユーラシア大陸内部の大型開発プロジェクトが始まることになる。昨年十二月に調印された中ソ間の経済技術協定や科学技術協力協定は、いずれも十年間の長期協定であるので、この点でも大きな役割を担うであろう。

こうした中ソ関係の改善によって、残されている課題は、党レベルの関係改善であるが、この点の中ソの対立時代とはちがって、ことさらとりたてて党レベルの関係をうんぬんすること自体が、いかにも西側的な見方であるのかもしれない。私がモスクワで再会したソ連中国学界の大御所であった中ソ国境会談のメンバーでもあったチフヴィンスキー外交学院長兼ソ中友好協会第一副主席は「私たちにっては党も政府もありません。私たちは全員が党员なのですから」と今回私に語っていた。こうした流れに沿っ

て、中ソの党機関紙『プラウダ』と『人民日報』の記者交換も、近く再現するものと思われる。

世界戦略上でも同一の立場

このような中ソ関係の改善に伴って、最近の中国は、一時期のような「ソ連脅威論」からいまや完全に脱却している。

ソ連を戦略的な脅威と見なすか否かの分岐は、中国すべての対外政策にとつての大きな要であり、人民解放軍の兵力削減のみならずSS20の極東配備にかんする中国の沈黙、いわゆる「三大障害」はそれとして中ソ関係の改善を妨げるものではないといった変化は、このような土壌から導かれるものだといえよう。

しかも最近の中国では、去る九月中旬下旬の中国共産党全国代表会議における陳雲政治局常務委員の発言に見られたように、「開放」経済体制や一連の経済改革を批判し、社会主義型の計画経済を重視する潮流も依然として根強く、彼らは対ソ改善にはきわめて積極的であるだけに、鄧小平指導部もそのような潮流を無視し得ず、この点からしても、中ソ関係

はさらに進展するものと思われる。

こうしたなかで、中国は最近、アメリカ側があれほど入念にSDI計画を中国側に説明したにもかかわらず、鄧小平主任自身がSDIに反対の立場を鮮明にしており、核軍縮問題でもむしろソ連寄りな立場で積極的な発言を展開しはじめており、また日本のGNP一割増問題や一連の「日本軍国主義復活」批判でも、いまやソ連と同じ立場に立ちつつあることを無視してはなるまい。

つまり、従来より更に一歩進んで、世界戦略上の諸問題で中ソ間が同一の立場を回復しつつあるのであり、最近の「靖国問題」での中国の厳しい対日批判は、ソ連を大いに満足させたのであった。

こうしたなかで、中国は最近、北朝鮮ばかりか、かつては激しく対立したモンゴル、さらには軍政下のポーランドとも関係を強化ないしは改善しつつあり、将来のベトナムやアフガニスタンとの関係も含めて、これら社会主義諸国間に中ソを基調にした「ゆるやかな同盟」関係が回復しはじめている、と私は見做している。